

去る 6 月 29 日から 30 日にかけて、地域計画連合の江田氏の全面協力をいただき、東日本大震災被災地である宮城県南から福島の視察に行っていました。29 日朝の仙台は霧雨が降っていましたが、集合時には雨も止み、概ね雨に遭うことなく日程を過ごすことが出来ました。

## 1 宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区

### (1) 日和山を中心とした視察

今回の視察においては、まず、閑上地区にある日和山を訪れました。名取市閑上地区は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災時に 10 メートルを超える津波が襲い、当時の総人口約 6,000 人のうち犠牲者が約 800 人と、壊滅的な被害を被った地区です。

日和山(標高 6.3m)上にある富主姫神社に近所の住民が避難したにも関わらず、日和山頂上から 2m 以上の高さの大津波に、神社諸ともに飲み込まれてしまったそうです。



実際に現地に赴いてまず、一面コンクリの基礎と草むら以外、なにも無い地域が広がることに、言葉ありませんでした。次に、都心郊外のような住宅区画の基礎が見渡す限り広がることに気付くと共に、気持ち良い爽やかな風が渡るのを感じて、「風光明媚」な立地に惹かれたサラリーマン世帯による住宅街が広がっていたかと思われま



日和山は小山というより丘といった体でしたが、平地の住宅街で、内陸に向かうには数本しかない橋(もちろん被災)を渡る必要もあり、ほかに逃げ場がどこにも無い場所だったことを実感しました。

日和山上には、震災前から海を守る弁天様を祭る富主姫(とみぬしひめ)神社と、震災後に遷座した閑上湊(みなと)神社の二つの神社が再建され、参拝する人が絶えませんでした。



### (2) 「閑上さいかい市場」での昼食

美田園 7 丁目にて復興仮設商店街が再開しており、ここでの名産の赤貝入り海鮮丼をいただきました。お店の貼紙によると、「閑」という字は常用漢字ではなく、伊達家当主が現地を訪れた際に名づけた漢字だそうです。元々はそんな逸話のある、仙台藩直轄の漁港町であった閑上地区は、日本一の赤貝の名産地としても知られています。その新鮮さと美味しさを味わってきました。

商店街の店主の皆さまは、もう少し内陸の仮設住宅から、週末に通って営業をされているとのこと



(3) 岩沼防集団地1号(造成中)

閑上地区は震災後いち早く現地再建案を打ち出した地区でもあり、再建計画については、市と住民との間でさまざまな意見が飛び交っている現状がメディアで報じられ、今回の視察の直前にもNHKの特集番組が組まれています。



商店街からバスで15分程度の場所にある、岩沼市の「玉浦西地区」にある、防災集団移転促進事業(防集事業)による団地予定地を視察しました。

立て看板の説明によると、このエリアでは、計2mのかさ上げを実施し、平成25年末には移転を開始できるスケジュールで工事が進

行中とのことです。

個人的には、かさ上げ高2mという高さの妥当性の是非は判断しかねました。他方で、次いで視察したモデル住宅団地に掲示されていた土地利用計画図を仔細に眺めると、この区域内での公営含む住宅の区画割りから、公園施設や生活利便施設の立地、生活動線となる地区内道路、緑道に至るまで、区画整理案がかなり具体的に出来上がっており、それなりに機能を集約して生活していく利便性に配慮が払われていることが伺われました。



(4) そのほか

「閑上さいかい商店街」が置かれた美田園地区は日和山周辺と標高はさほど変わらないものの、地形の関係か津波被害に見舞われなかったエリアとのことで、ごく近くでありながらあまりにコントラストがあることも少々ショックではありました。



<左は2枚ともに宮城県山元町復興公営住宅>

バスの中から通過しながら視察した山元町でも同様で、復興が力強く進んでいることが伺われる「いちご団地」や、入居者を待つばかりに建て上がっていました。既に新生活が営まれている復興公営住宅(災害公営住宅)にホットする気持ちになりましたが、一方、復興の未だ進まない地域の皆さまの心中いかばかりかと考えると、言葉がありませんでした。

福島県相馬市 程田明神前 災害公営住宅(東日本大震災被災三県初の戸建てタイプ)



## 2 福島県新地町

### (1) 漁協跡地、JR常磐線駅跡地

午後2時半過ぎに、地域計画連合の江田氏が復興支援にあたられている福島県新地町に入り、まず港にあった地元漁協の建物を視察しました。新地町も10mを越える大津波の直撃を受けており、



に向かう途中、更地状態の住宅街跡を通り抜け、基礎部を残して根こそぎ失われた橋が見られました。

草むらの間にかろうじて見える常磐線の線路を越えてゆきましたが、電車が止まった折に踏切が遮断され、大型トラック運転手が施錠して車から降りてしまったため、続いていた乗用車が何台も逃げ遅れたそうです。



漁協内は、今もガラスが散乱し、津波の爪痕を生々しく残しており、大自然の威力をまざまざと見せつけられました。各所で指摘されていることではありますが、直撃を受けてしまったから抗うことの困難さ、事前の備えの重要性を再確認する思いでした。

<いずれも福島県新地町漁協 建物内>





＜JR常磐線 新地駅跡地＞  
 屋根付きの駅舎があった改札口付近、黄色い歩行標識がわずかに残るばかりでした。

跨線橋も階段部分が崩れるなど被害が甚大だったらしく、撤去済みでした。

(2) 集団移転予定の団地視察（造成中）

津波が押し寄せた極限地だという地点より更に上った地域に予定地がありました。



### (3) 新地町住民（仮設住宅在住）との交流



新地町の農村改善センターにて、大震災まで旅館の女将さんだった村上美保子さまのお話を伺いました。村上さんは三陸の出身で、子供の頃の教育のおかげか、地震直後から大津波が来ると直感し、ご主人を説き伏せてともに車で避難されたそうです。

避難する道すがら、コンビニで、床に落ちたので売れないという店員さんを説き伏せて「おにぎり」を購入し、当日夜に避難住民の皆さまの貴重な食料として活用できたとのこと。また、避難所生活時のSNSを活用した救援依頼の行い、連夜

にわたりお礼状（葉書）を書き続けたそうです。現在も、仮設住宅でのコミュニティ活性化の取り組みなど、実体験の重みとともに、機転や細やかな心遣いを感じさせられました。

また、「東北まち物語紙芝居化 100 本プロジェクト」の一環で作成された、震災紙芝居を読み聞かせて頂き、震災時の教訓の苦さと語り継がねばとの思いを感じました。

より多くの方に大震災の教訓について知って頂く機会を増やし、被災の記憶を風化させず、次の世代へ伝承させていく目的で進められている、「東北お遍路プロジェクト」についてもご紹介いただきました。



### (4) 新地町復興推進課長からのご説明



福島県相馬市松川浦にある宿泊先「なぎさの奏 夕鶴」にて、新地町復興推進課長 鴫田芳文さまから、新地町の被災状況および直後期から数ヶ月経過するに至るまで、どのように対応したか、さらに、既に高台集団移転を決定し、住民主体での話し合いによる地域づくりを進めている復興計画の進展状況について、ご説明していただきました。

震災前から、住民と住民、また行政と住民との間での「顔の見える関係」が有ったか否かで震災後の計画や進展の有り様はかなり違ってき

ているとの指摘や、何をもって「復興」といえるのか、という議論が特に印象的でした。

宿泊先は港から少し陸に入り、さらに山を少し上ったところにありましたが、旅館で当日撮影された映像を視聴し、坂を下りたすぐそこまで津波が押し寄せて引いていったのを目の当りにし、映像越しにも、当時の緊迫感が伝わってきました。



< 3. 11当日に  
旅館で撮影された  
津波被災の映像 >

2日目の朝に、相馬港を通りましたが、日曜にも関わらず、地元漁師の皆さんが試験操業をされていました。新地町や相馬は、船の被害は比較的軽微で済んだものの、福島第一原発事故の影響で、現在も操業をすることを許されていません。

また、原釜地区の災害公営住宅が山の高台（細道を迂回して登らないと辿り付けられないようです）に作られているのを遠目に見た後、東日本大震災被災三県初の戸建てタイプの災害公営住宅となった、福島県相馬市程田明神前（ほどたみょうじんまえ）団地を視察（本報告1.（4）に写真掲載）、その後、南相馬市へと移動しました。

### 3 福島県南相馬市

#### （1）南相馬ソーラーアグリパーク

2日目に、視察した「南相馬ソーラーアグリパーク」は、塩害のダメージを受けた津波被災地を活用し、太陽光発電所と植物工場を舞台とした体験学習を通じて、地元の子供たちの成長を支援し、全国の人々との交流を行う復興拠点として、官民の協力のもと、本年3月にオープンしたばかりの施設です。



子どもの職業・社会体験施設「キッズニア」の運営会社が子ども向け体験学習プログラムの制作・運営に協力しているというだけあって、実施施設を見て触れることを通じて「気付き」が得られる、楽しいプログラムを展開されていると感じました。また、ドーム型の植物工場を初めてみたということもあってか、大人でも学びがあったように思います。

未来に向かうポジティブな復興の取組みとして、期待したいと思います。



## (2) 小高町住人 (NPO 浮船の里) との交流

小高町は、平成 18 年に原町市および相馬郡鹿島町と合併し南相馬市となった町であり、現在の住所は南相馬市小高区ということになります。市中心部の原町の中心街は「緊急時避難準備区域」が解除され、既に日常を取り戻している感があるのに対し、小高町は中心街を含む大部分が現在も「避難指示解除準備区域」として、立入りは自由ですが、自宅に宿泊することが許されないままとなっています。

小高町の住人で「NPO 浮船の里」理事長である、久米静香さまに、震災直後の体験、生活が落ち着くまでの放射線量に脅えながらの生活についてお話を伺いました。

日常生活からいきなり非常事態の中に放り込まれ、生活基盤が失われたまま生活を送ることの大変さ、行政からの情報が無いまま巷間あまりに多様な情報が飛び交うことにより増大する混乱と不安感、いつ生活基盤の今後の見通しが見えない閉塞感、といった問題が現在も続いていることを実感しました。

行政には途方も無い未来図を描くより、まず下水道をはじめとするインフラを復旧し、除染を進めて欲しい、という言葉の切実さに、2年を経過した現況を、改めて考えさせられました。



<左写真は  
小高区役所の上水栓（ホースの  
先に蛇口有り）と仮設トイレ>

その後、久米さまに、町内をバスで案内して頂きました。南相馬市に入ってから、道沿いの津波に見舞われた爪痕も悲惨なもので、車体や船がいまだに転がっていました（一度は撤去されたものの、保管・処分の目処が立たず、元の場所に戻されたそうです）が、それ以上に、人が住まなくなった町の痛ましさに、かける言葉を失いました。

表通りは一見綺麗になったようにも見えますが、少し街中に入ると、商品が雪崩落ち散乱したままの店舗、玄関前に背の高い草木が伸びて立入りが難しそうな家、被災した瓦屋根にブルーシートが掛けられたままの家屋などが多く見られました。また、最初の数ヶ月、雨風に曝されっぱなしだった影響か、静かに傷みが進行し、緩やかに崩れるのを待つだけにも見える家屋もありました。



電気は昨年の警戒区域解除時期に復旧し、上水はかろうじて供給があるものの、上下水道管はいまだに復旧しておらず（工事中という看板と、その上に「休工中」と貼紙のある看板とがありま

した)、つい最近、生活ゴミを2年ぶりに回収してもらえたそうです。

山積みの瓦礫の中に見つけた時計は、「15時10分」を指したままでしたが、町の機能がそこで止まったまま、経過する時間の重みがあるように感じているかのようで、復興までの道がまだまだこれからであることを実感しました。

### (3) そのほか

小高町の南に隣接する浪江町では「警戒区域」指定が継続されており、立入禁止として、町の入り口付近にバリケードが設置されていました。

福島駅に向かう道すがら、飯館村を通過しましたが、雑草が伸び放題の草原が広がり、重いゴムのようなシートが掛けられた、除染の土壌が仮置きされている場所がところどころに見られました。また、江田氏が読み上げる、手持ちの線量計の数値が、飯館に入って数倍に上がったのを聞いて、正直ドキッとさせられました。



## 4 終わりに

今回、駆け足ながら、宮城県南部、福島県の被災地をいくつか視察させていただき、想定外のことが実は想定外ではなく、事前対策を講じておくことが悔やまれるケースもあれば、想定できないことが起きてしまったことは仕方が無いにしても、事後の対応で明暗が分かれているケースもありました。

いずれも現地に実際に行ってみて初めて理解できたことがら、肝に銘じるべき教訓が本当に多かったと感じています。また、首都圏などの大都市圏で同様の事象が起きた場合を想像すると、ぞっとする思いにもなりました。

今回の学びを、いかに広く伝えていけるか、大きな宿題を頂いたと思うとともに、危機管理担当者の皆さまにも、是非、被災地を歩き、現地の方のお話を聞いていただきたいと感じました。

(文責：英由佳)